

## XII 第 10 の神のことば 「隣人の家を欲してはならない」

出エジプト 20:17、 申命記 5:21

20:17 あなたの隣人の家を欲してはならない。あなたの隣人の妻、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを欲してはならない。」

出エジプト記 20 : 17

5:21 あなたの隣人の妻を欲してはならない。あなたの隣人の家、畑、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを欲しがってはならない。」

申命記 5:21

### はじめに

今日の出エジプト記と申命記ははじめの言葉「家」と「妻」を入れ換えている。その理由は明らかではないが、申命記は男性に属する「妻」を他と区別して独立した戒めにしたのかもしれない。一方、出エジプト記の「家」は、その後の「隣人」に属するものの中にあってすべて命あるものと、命のない物質的な「家」を区別しているのかもしれない。これは推測に過ぎないのであるがほかの解釈も成り立つ。

### 1. むさぼりの罪

「欲する」「欲しがる」という言葉はヘブル語の「火」「炎」という言葉から派生したと言われている。火のように燃え上がり、炎上するところから熱望、渴望を意味するようになった。それで終わらないで、他人の持っているものまで自分のものにしたい、というよこしまな思いに駆り立てるのである。熱望や願望はそれ自体人間の普通の感情であるが、それは、荒々しい獣と同じで制御されなければ暴走し、狂暴となりかねない。他人・隣人の所有するものを欲しいと思うのは、私どもの動機が問われていると言える。まさに動機が問題である。

「欲しがる」ことの中に「隣人の妻」を入れていることは、現代人の私どもには抵抗がある。妻が財産扱いされているからである。人権侵害・女性蔑視も甚だしい。しかし、当時の社会状況においては既婚の女性は家長に従属するものとされていたことを考慮しなければならない。隣人の妻を欲しがるのが人間同士の醜悪な、陰湿な憎悪を生み出すことは、今日も変わりがない。「欲しがる」という思いには制限がない。遂には自分の忠実な部下を戦場で故意に死なせて、その妻を奪い取ったダビデの例は知らないものがない。

これこそ「貪り」の最たる悪例である。この極端なダビデ王の姦淫の罪と比較できないけれど、私どもが身近に共通する貪りの罪を告白した偉人がいる。

アウグスティヌスである。ルソー、ルターとともに三大告白文で知られるアウグスティヌスの「告白」は非常に有名である。

彼の経験は、私どもも大なり小なり経験しているところである。欲しいものを手に入れ

ようと涙ぐましい努力を重ねて、ついに手に入れたものに対する興味はたちまち薄れて、消え失せてしまうのが常ではないか。このように、私どもが置かれている世界は、必要以上のモノにあふれかえっており、満ち足りることを忘れて、欲しい欲しいの狂騒曲に駆り立てられて日々を過ごしているのではないだろうか。コマーシャルに煽り立てられて unnecessary なものを衝動買いする人々の中に、自分も入っているのではないかと反省しきりである。その一方では、飢えと貧困にあえぐ無数の人々があふれている世界でもあるというのにいったいどうしたことか。

## 2. むさぼりと偶像礼拝

コロサイ人への手紙 3 章 5 節に使徒パウロのことばがある。「ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。」パウロはテモテへの手紙第一の 6 章 10 節にも第 10 戒に基づく警告を発している。「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。」

これらのパウロを通して語られた主のことばは、モーセの十戒の 10 番目のことばの恐ろしさを示して、警告を発していることがわかる。貪欲が人間性を侵食する様子を具体的に教えてくれるのである。私どもは心の中で欲しがった程度の軽い意識で、事柄の深刻さを軽視するのであるが、キリスト者にとっては信仰から離れていく原因とさえなるのである。神から引き離されることは破滅に至るからである。

戦後 76 年、日本は世界有数の経済的繁栄を誇る国家である。その地位は下降傾向にあっても、経済的豊かさが唯一の幸福のように思われるのではないだろうか。豊かで便利で快適な生活ができるようになった今、マモンに対する礼拝を当然のようにささげられているのではないだろうか。

マモンが人を幸福にするという確固たる信念が人の心をとらえて離さない世界になっており、キリスト者と言えどもその思いが無意識に肯定される危険性がある。いわゆる世俗化である。マモンが保証する幸福は一時的で刹那的で、信仰から迷い込ませるあらゆる悪の根であるというみことばの警告に耳を傾け、心して信仰者の道を貫徹したいと願わされる。

偶像礼拝の指摘を受けるとき、十戒の第二の神の言葉に思いが結びつく。そのことに対する使徒パウロによる、コリント教会への警告もしっかりと受け止めたい。

「兄弟たち。あなたがたには知らずにいてほしくありません。私たちの先祖はみな雲の下にいて、みな海を通過して行きました。そしてみな、雲の中と海の中で、モーセにつくバプテスマを受け、みな、同じ霊的な食べ物を食べ、みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストです。しかし、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。これらのことは、私たちを戒める実例として起こったのです。彼らが貪ったように、私たちが悪を貪ることのないよう

にするためです。あなたがたは、彼らのうちのある人たちのように、偶像礼拝者になってはいけません。聖書には『民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた』と書いてあります」(I コリント 7:1~7)。

### 3. 信仰によって貪りの罪に勝つ

貪りの罪という難敵に勝つには「信仰による以外にはない」ことを先に述べ、詳細は後で述べると約束していた場面が来た。実は欲しがる思い、むさぼりの心は私どもの信仰を崖っぷちに立たせる大敵である。ここでも、パウロによる弟子テモテへの手紙第一の6章6節から8節に学ぶことにしよう。

「しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそが、大きな利益を得る道です。私たちは、何もこの世に持って来なかったし、また、何かを持って出ることもできません。衣食があれば、それで満足すべきです。」

「満ち足りる心」と「満足」という言葉が目に残る。「むさぼり」と「欲しがり」の底なし沼にずるずると沈み込む私どもの罪の心を抑制するのではなく、それに勝る「満ち足りる心」があるというのである。負けないだけでなく、打ち勝つ道があるというのである。それこそ、大きな利益であるというのは逆説的な勝利宣言ではないだろうか。「欲しがりません勝つまでは」という痩せ我慢でなく、勝ち得て余りある凱歌を謳っている。なんという恵みであろうか。イエス・キリストを信じるまことの信仰を「敬虔」と呼び、敬虔の証明は「満ち足りる心を伴う」ことである。その理由が続く7節である。「私たちは、何もこの世に持って来なかったし、また、何かを持って出ることもできません。」この言葉は神に称賛されたヨブも1章21節で語っている。「そして言った。『私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。【主】は与え、【主】は取られる。【主】の御名はほむべきかな』」。同じ意味の言葉が伝道者の書5章15節にも記されている。旧約聖書の神の民はこの敬虔さを持っていたのであるが、新約聖書の聖徒たちも同様であった。

「金銭を愛する生活をせずに、今持っているもので満足しなさい。主ご自身が『わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない』と言われたからです」(ヘブル 13:5)。

### 4. 伝道者パウロの心意気

尊敬する加藤常昭師は、その著書において使徒パウロのミレトスの港での決別説教を取り上げてパウロの伝道者魂を紹介している。使徒の働き20章32~35節を引用する。

「今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができますのです。私は、人の金銀や衣服を貪ったことはありません。あなたがた自身が知っているとおり、私の両手は、自分の必要のためにも、ともにいる人たちのためにも働いてきました。このように労苦して、弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを、覚えて

いるべきだということを、私はあらゆることを通してあなたがたに示してきたのです。」

私は、加藤先生ご自身もその心意気で伝道者の務めを果たしてこられたのではないかと、勝手に推し量っている。このように思う自分自身、及ばずながら同じモットーで教会に仕える志をいだいてきたのである。「受けるよりも与えるほうが幸いである」という主の言葉は、「あなたの隣人の家を欲してはならない」という言葉を積極的に言い換えてくださったみことばである。このみことばに生きて行くことが、貪欲の罪から解き放たれた者の自由の生活なのである。

## むすび

**ハイデルベルク信仰問答 問 114** 「それでは、神へと立ち返った人たちは、このような戒めを完全に守ることができるのですか。」

**答** 「いいえ。それどころか最も聖なる人々でさえ、この世にある間は、この服従をわずかばかり始めたにすぎません。とは言え、その人たちは、真剣な決意をもって、神の戒めのあるものだけではなくそのすべてに従って、現に生き始めているのです。」

**問 115** 「この世においては、だれも十戒を守ることができないのに、なぜ神はそれらを説教させようとなさるのですか。」

**答** 「第一に、わたしたちが、全生涯にわたって、わたしたちの罪深い性質を次第次第により深く知り、それだけより熱心に、キリストにある罪の赦しと義とをもとめるようになるためです。第二に、わたしたちが絶えず励み、神に聖霊の恵みを請うようになり、そうしてわたしたちがこの生涯の後に、完成という目標に達する時まで、次第次第に、いよいよ神のかたちへと新しくされてゆくためです。」

はじめに述べた難敵「貪りの罪の動機」の解決は、信仰によって、少しずつ。ゆっくりと、しかし確実に、聖霊によって義認と聖化の道を進み、やがてキリストに似たものとされるのである。ピリピ人への手紙3章13～14節を信じて。

「ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるといふ、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」

今私は、処女作「いつ聖霊をうけるのか」みことばに聴くシリーズ1を思い浮かべている。「著者は自分の最初の著書に向かって著作を重ねる」という尊敬する評者の言葉のように、この書を終えることになった。